

Title	巡られる人々：四国遍路における巡礼者と地域社会の民俗誌・史
Sub Title	
Author	浅川, 泰宏(Asakawa, Yasuhiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.54 (2002. ) ,p.53- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成13年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000054-0053">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000054-0053</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 平成 13 年度 大学院高度化推進研究費 助成金報告

## 巡られる人々—四国遍路における巡礼者と 地域社会の民俗誌・史

浅川 泰 宏\*

### 【概要】

本研究は、巡礼体験と共同性に着目した世界の巡礼の宗教人類学的な比較研究という大きな枠組みの一環として、日本の主要巡礼のひとつである四国遍路<sup>1</sup>を事例に、「巡る側」である巡礼者と「巡られる側」である巡礼地の地域住民との間でどのような共同性が構築されるのかという問いの解明に向けて企画されたものである。中でも両者のコミュニケーションの接点である「接待<sup>2</sup>」に着目し、分析することを通して、近・現代における「移動」の文化・民俗と「定住」のそれとのせめぎ合い（葛藤あるいは融和）を、宗教人類学的フィールドワークを基盤として、巡られる側の当事者の観点から解釈学的に解明するための基礎的研究という位置づけを持つ。

本年度は徳島県南部地域（阿南市、那賀郡、海部郡）と高知県南西部（高岡郡窪川町、幡多郡佐賀町）を中心に、のべ5回のフィールドワークを実施し、聞き取りデータや関連文献の収集に努めた。

また同時に、前年度までの研究を踏まえて、先行研究とフィールドデータとの摺り合わせなどから、特に本年度は文化人類学的なフレームワークを準備することを主眼においた理論的研究も行った。

これまでの聞き取りや過去帳調査などから得ていた「遍路道を外れた場所にも遍路がやってきていた」というフィールドデータを、M. サーリンズの互酬性の議論に組み合わせて、「接待」の現場を札所寺院や遍路道を外れたところまで含めるパースペクティブを提示した【論文1】。

また、巡礼者に伴って「移動」する情報のダイナミックな側面を取り上げ、これを『尻なし貝』物語を事例として論じた。類似の物語を持つ徳島県阿南市と高知県窪川町とを比較することで、四国遍路の歴史的な意味性の変容や交通体系の変化に伴う巡礼行為の変化を明らかに

すると同時に、このような巡礼空間における情報のダイナミズムを取り扱う枠組みとして『巡礼功德譚』というフレームワークを提示した【論文2】。

以下、本年度研究の成果としてこれら二つの論文を要約し、その他の未発表の成果と今後の展開を簡単に紹介して、本年度の成果報告とする。

### 【論文1】「遍路道を外れた遍路—新しい巡礼空間モデルの構築に向けて—」<sup>3</sup>『日本民俗学』第226号（日本民俗学会）

四国遍路は一般に「四国八十八カ所（巡礼）」と換言可能とされる。四国遍路が弘法大師の聖跡巡礼であるという理念から導かれるこの発想は、この巡礼が、札所寺院（点）とそれらを繋ぐ道（線）からなる空間構造として認識されていることを暗に示す。その場合、遍路者は札所や遍路道を通過する存在であり、彼らと地域社会の関わり合いも、その沿線の民俗・文化ということになるのだが—。

本稿では、このような既成観念の限界を明らかにする事例として「遍路道を外れる遍路」を取り上げた。1997年より本年まで継続的に実施した徳島県南部地域での広域過去帳調査の結果より、道を外れた場所にも多数の遍路が巡っていたことを、まず明らかにした。

次に、彼らが遍路道を外れる理由を接待に求め、これを説明するために接待を交換論的に再考した。従来、接待はサーリンズのいう一般的互酬性と均衡的互酬性の間で議論されてきたのだが、ここに、受け手の側から否定的互酬性的な応乞食的接待と捉え直した「乞食・托鉢」を加えることで、巡る側と巡られる側との交換を「接待」で統一する視座を確立する。

この作業の結果、「理念的には巡礼体系と無関係ながら、しかし巡礼者が接待を求めてやって来るが為に、巡

礼者と日常的な関わり合いを持ち、その結果、巡礼体系の一部として組み込まれた社会的空間を「乞食圏」という言葉で概念化した。応乞食的接待を日常的に行うことで遍路者を経済的にサポートし、四国遍路に社会的弱者が多いといわれる状況を実質的に支えた人々の生活空間であるこの乞食圏は、近年活発化している「世界遺産登録運動」や「四国いやしのみち建設運動」など、地域社会が遍路を迎える文化・民俗をより広い観点から議論する上で重要な要素である。

以上の議論を踏まえて本稿では、(1) 大師に祈りを捧げる場所「札所寺院」、そして(2) その札所間を繋ぐ順拝移動ライン「遍路道」、更に(3) 旅の資金を獲得する為の補助領域である「乞食圏」という、点・線・面の三つの要素からなり、ムラのウチ・ソト的空間モデルと巡礼全体の空間モデルを接続する三元的空間モデル「数珠状の遍路空間モデル」を提示し、巡礼研究の対象領域を拡大することで、新たな研究の可能性を切り開くことを目指した。

## 〔論文 2〕 「巡礼功德譚のダイナミズム—四国遍路「尻なし貝」物語を事例として」<sup>4</sup>

本稿では、巡礼の意味世界を表象し、人々を巡礼へと駆りたてる動機付けの機能を有するものとして「巡礼功德譚」という枠組みを設定し、その有効性を検討した。これは民間伝承などの蓄積を巡礼研究に導入する一試みであり、同時に類型化などスタティック的な分析が主であった従来の霊験譚や伝説を巡る諸研究に対して、「再帰性(reflectivity)」「拡散性(diffusion)」というダイナミックな視点からのアプローチの可能性を探るものでもある。本稿は、この巡礼功德譚の変容から、関連の巡礼の意味性や外的世界の変容を論じることを主題とした。事例としては、『四国徧礼功德記』(真念著・1690 刊)に収録の「阿州小野の尻なし貝(仮称)」を取り上げ、フィールドワークの結果などから、四国遍路における意味性や交通体系の変化に伴う巡礼行為の変容などを読みとっていった。

まず、近世期の四国遍路に関するガイドブックや、絵図、文芸作品などの諸メディアの分析から、当時なされていた四国遍路の民衆化が、ハード面では札所重視で、行程を短縮・簡略化し、インフラも整った「八十八カ所巡拝」の成立、そしてソフト面では巡礼に関する情報の蓄積と巡礼体系への参加を促す物語群の定着といった「四国遍路に関する言説空間」の登場という二面展開で行われたということを示した。特に真念の著した『四国

遍路道指南』(1687 年刊)とその系譜を引くガイドブックの売れ行きを、周辺資料から論証し、当時、このガイドブックを通じて四国遍路に関する情報がかなり広まっていたことを示したことは、特筆すべき成果と言える。

次に、事例として取り上げた伝説に登場する「尻なし貝」の生物学的な正体が「イシマキガイ (*Clithon retro pictus* 原始腹足目アオブネ科)」であることを現地調査から突き止めた。そして、この尻なし貝は、タニシやカワニナなど似たような巻き貝もたくさんいるなかで、なぜか遍路道の渡河ポイントにちょうど(金剛)杖の先ほどに先端が欠けている貝が生息しているという不思議な自然の摂理の原因を、「オダイッサン(弘法大師)が杖についてお尻がまるうなった」と地元で語られているように、この貝をめぐる外見的特徴や環境要因を遍路空間を流れる民俗宗教的コンテクスト即して説明した姿つまり生物学的な種としてのイシマキガイに、四国遍路の宗教的文化的な記号性を付与して解釈したものであることを明らかにした。

そして、このような尻なし貝の伝説を主に近世期に語られた A. 徳島県阿南市福井町釘打の事例と、本格的に登場するのは戦後以降と、比較的新しい B. 高知県高岡郡窪川町の事例とを比較を通して、交通革命による巡り方とそれに伴う巡礼者の意識変化という四国遍路世界の変容を指摘した。A の伝説の消滅と B のその発生は、ほぼ同時期に時を同じくして起こっており、あたかも A から B へ水平移動したように見える。このシフトが巡礼功德譚の拡散性によって準備されたものであること、遍路達に伴って四国遍路空間を浮遊している伝説が、その要素を共有するような他所に定着することを可能にする四国遍路独自の思想として弘法大師遍路信仰があることを、本稿では指摘した。

最後に、巡礼功德譚はそれが関連する巡礼体系全体と密接にリンクしており、絶えず体系の変容をダイナミックに表象していく。よって、これらの巡礼功德譚のダイナミズムを分析することで、巡礼体系全体の変容を論じることができ、巡礼功德譚というフレームワークとそれに基づく研究には、そのような可能性が期待できると結論した<sup>5</sup>。

## 〔その他の成果〕

この他、論文や研究発表として未発表の成果としては以下のものがある。

まず、4 月に実施した歩き遍路参与観察の結果から、

特に現代の歩き遍路に関して、“宿”が移動と定住の重要な結節点になっていることがわかった。そこで次年度以降の新たに宿に関する調査を企画するべく、その予備調査や理論的枠組みの整理等も平行して行った。具体的には、2002年1月に実施した21番、22番両札所近辺の遍路宿業者に対する聞き取り調査などである。なお、この問題は、筆者がリサーチアシスタントとして参加している（2002年4月より客員研究員）早稲田大学道空間研究所の遍路宿と宿泊施設に関するプロジェクトでの成果と合わせて論文にする予定である。

また、地域社会の「遍路」と「乞食遍路」を分類する認識論に関する調査についても、新たなデータを得ること

とができた。こちらは、2002年9月の日本宗教学会（大正大学）、10月の日本民俗学会（筑波大学）で研究発表を行う予定である。

#### 注

- <sup>1</sup> 「四国八十八カ所」ともいう。四国四県にまたがる大規模な巡礼で、年間10万人余の参加者があるといわれている。
- <sup>2</sup> 主に功德を授かる為に、巡礼者に財、サービスを施す行為を接待という。
- <sup>3</sup> 『日本民俗学』第226号（日本民俗学会）2001年5月
- <sup>4</sup> 『哲学』第107集（三田哲学会）2002年1月
- <sup>5</sup> なお、本稿は論文執筆前に、日本民俗学会第53回年会（2001年10月）において研究発表を行った。

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

## 海外派遣駐在員の配偶者のキャリア形成行動と キャリア発達に関する調査研究

石川孝子\*

標記研究は、年度当初、国内外の先行研究の徹底的なレビューから始めるつもりであったが、博士課程1年目ということもあり、厳密にレビューするためには、本研究テーマに直接に関係する国際経営学・社会心理学などの基礎理論の習得が前提との認識に至り、その方向での学習を進めた。一方で、既に実施していた調査研究の結果を論文としてまとめ、学術雑誌へ投稿を完了した。

### [平成13年度の実績]

「デュアル・キャリア夫婦に関する探索的研究—夫の海外転勤に伴う妻のキャリア継続・中断・転換に着目して—」（共著）『国際ビジネス研究学会年報2001年版』が本年度における研究成果である。概要は以下の通りである。

本調査研究は、夫の海外転勤・海外留学に同伴した経験を有し、現在は東京周辺で就業する30代後半から40歳位までのキャリア中期にある既婚女性10名にインタビューを実施し、大学・短大卒業時から現在に至るまでのキャリア形成の様相を、夫の海外転勤への対処パターン、就業の継続・中断・転換、またキャリア形成の外部環境としての組織や職務の特性などの観点から分析し、

現時点におけるキャリア発達、価値観・職業意識などについて吟味した。

その結果、夫の海外転勤の時点で、総合職に就く者や、職務概念が明確で外部労働市場との隔たりが少ない職場すなわち外国型の組織で働く者たちの中には、夫の勤務地への転勤や現地法人への異動を妻側の雇用主が措置したり、夫の赴任地からテレワークが可能な措置をするケースも出てきていることがわかった。一方、夫の海外転勤前に不明確な職務概念や行き止まりの職種に就いていた者は、夫の海外赴任地に同伴し、次のキャリア・アップの為に学位・資格の取得の後、専門性をいかして外国型職務編成・組織特性の組織で働くケースがほとんどであった。

また、対象者のキャリア発達段階という側面から見ると、キャリア発達が順調に進んでいる者に共通して見られる特徴は、自らの深い洞察力や高い学習能力と同時に将来のキャリアの明確な方向性や展望を表明していることである。一方、出産や海外転勤をきっかけにキャリア探索期に長くとどまるケースでは、キャリア初期において行き止まり職でチャレンジする機会に恵まれなかったり、組織形態への不適合を起こしたこと、自らの強みやドメインの把握が出来なかったことなどが原因となって